

教科書だけで大学入試は突破できる

金谷 憲 編著

四六判 236pp.
本体1,800円＋税

山賀淑雄



入試問題分析から英語指導法改善への指針

大学への進学希望者の多い学校に勤務する教師が、生徒に入試を突破できる十分な学力を身に付けさせたいと思うのは当然のことである。そしてその1つの方策として、様々な参考書や問題集を生徒に与えるのが一般的である。このことは、教科書だけでは入試を突破することは容易ではないという考えの表れとも言える。

本書はそのような姿勢に対して、大学入試問題を文法、語彙、分量の観点から広範囲にしかも詳細に分析し、教科書と突き合わせることで、教科書だけでも十分に入試に対応できることを示した画期的な書物である。

本書は、3つの観点からの分析と高校3年間を見通したカリキュラム編から成り立っている。

まず初めに文法の観点からであるが、2003年から2007年の5年間に及ぶセンター試験、主な国立大学及び私立大学を調査対象とし、延べ360もの大学・学部の入試問題の分析を行っている。対象とする文法項目を63とし、その文法項目が入試問題の中で問われているかどうかを調査している。そしてその結果、10回以上問われている文法項目は上位14位までで、35位以下の項目は1回または0回という驚くべきことがわかった。しかも、その内容は直接文法知識を問うものから間接的に問うものへと近年大きく変化してきており、文法知識を用いた運用力をみる問題が多くなってきていることがわかった。特に難関校と言われる大学にこの傾向が顕著になっている。この分析結果は、教科書で扱う文法項目で入試対策は十分であることを示すとともに、指導内容を単なる穴埋めや並べ替えのレベル

から、その文法知識を自分で使えるレベルへと改善していく必要性を示唆しているものと言える。

次に、語彙の観点からであるが、本書では中学校と高校の教科書で扱われる語彙数を算出し、その語彙が入試問題をどのくらいカバーしているかを、難関大学を中心に分析している。その結果、平均カバー率は約95%という非常に高い率となった。本書ではさらに、語彙の推測可能性や配点などから算出した独自の解答可能率という数字を用いて問題の分析を行った結果、75%の大学・学部で解答可能率が70%を超えた。先ほどの文法に加え、語彙の観点からも教科書は大学入試のかなりの部分をカバーしていることがわかる。

3つめは分量の観点からであるが、ここでは単なる英文の総語数の分析にとどまらず、解答時間を考慮した読解スピード、リスニングの読み上げスピード等の分析も行っている。予備校などの分析では通常、総語数と難易度にとどまるが、本書では受験者（解答者）が実際に解答する場面を想定した分析になっている。そしてこの結果から、入試問題の語数は東大を始めとして増加の傾向にあり、wpm値は100を超える大学も多いことが明らかになっている。中学・高校の教科書を従来型の文法・訳読だけで教えていたのでは、もちろんこのような入試問題に対応はできない。そこで本書では教科書を用いて分量を増やす方法や速読指導法など、質・量ともに変化している入試問題に対応するための具体例が示されている。

以上の3つの観点からの分析に加えて、第5章のカリキュラム編では、現行の教科書を用いて大学入試に対応するために、高校3年間のそれぞれの時期における効果的な指導法が示されている。膨大な問題分析を単なる分析に終わらせることなく、検定教科書が入試問題を十分カバーしていることを示しつつ、さらにこの分析を踏まえ、効果的な英語指導法を提示している点が本書の最も優れている点であると言えるだろう。

本書は進学指導を行っている英語教師がこれまで漠然と抱いていた入試問題に対するイメージを一新させるとともに、自らの指導法を振り返り、改善を図っていくための貴重な一冊となるだろう。

(やまが よしお・新潟県立柏崎翔洋中等教育学校教頭)